

# “ものさし”統一をめざしてテスト標準化を断行、 社内外から評価される体制を確立



ネットワンシステムズ株式会社 様

経営企画本部 第1 応用技術部  
部長 飯田 健二 氏



経営企画本部 第3 応用技術部  
オブティマイズチーム シニアエキスパート  
坂本 伸治 氏

テスト自動化を進めたことで、  
人によって異なる曖昧な解釈の余地を  
なくせたのもよかったです

取り扱いネットワーク機器の安定稼働を保証するため、  
基本性能テストを重視していたネットワークシステムズでは、  
“ものさし”統一のため、テスト標準化、自動化を積極的に推進。  
その中でSpirent iTest がプロセス効率化と信頼のテスト結果を生み出している。

## 自社をICT 実験場として、ワークスタイルを変革

誕生したのはインターネット黎明期だった。それから25年、ネットワークシステムズ株式会社は、ネットワークを中心としたICT インフラ構築のプロフェッショナルとして、顧客のビジネスや人々の生活を支える新しい社会インフラの構築に貢献してきた。同社は顧客ごとの要望や環境に合わせて製品やサービスを柔軟にデザインし、あらゆるニーズにワンストップで対応する。それとともに、ネットワークの性能や信頼性、導入後の運用や将来の拡張、投資効果をふまえた付加価値の高いソリューションを提供している。

また、自らが最新ICTの実験場であるべきだとしてワークスタイル変革に取り組み、フリーアドレス制を導入。オフィス全域に無線LAN、約3,000名分の仮想デスクトップ環境を用意、さらに相手の状況に応じて電話、メール、Web会議など最適なコミュニケーション方法が選択できる統合コラボレーションツールを利用するなど、新しい働き方を顧客に提案している。

## 比較や評価が困難だった“ものさし”違いのテスト

同社では、顧客にネットワーク機器の安定した稼働を保証するため、早くから取り扱い製品全般にわたって性能テストを行ってきた。しかし、その詳細は担当者に一任されていたため、それぞれ製品によってテスト項目や判断基準が異なった。これは違う“ものさし”で製品を見ることになり、比較や評価が困難だ。そこで、全社規模でテストの標準化を実現することになった。ネットワーク機器の標準機能を検証するテスト手順書を作成するとともに、項目リストを整えたのだ。

2007年、そうした中で、テスト自動化もテーマとして上がり、OSバージョンアップの頻度の高い製品など、繰り返しテストを行う可能性の高いものはこれを実現することになった。また、テスト標準化体制の整備により、社内外の人的リソースの最適化をめざした。

## “標準化するのなら、 自動化まで行くのが自然だと思った”

では、テスト自動化ツールとして何を選択するか。当時、ネットワーク分野で自動化を実現するツールは、Spirent iTest が唯一無二の製品だった。経営企画本部 第3 応用技術部 オブティマイズチーム シニアエキスパート 坂本伸治氏は、人的ネットワークでその存在を知り、さっそく試してみた。坂本氏は次のように述懐する。  
「最初にテスト標準化対象製品として挙げたのは、Cisco製のルータやスイッチでした。テストで試験するときにSpirent iTestを導入できたらと考えたのです。せっかく標準化するのなら、自動化まで行くのが自然の流れだと思いました。当時、ネットワーク分野で自動化をテーマにした製

品は他になかったんですが、“これは使えるかな”と思いました。ある程度プログラミング知識のあるエンジニアが効率よくテストするのに向いているツールでしたが、それは当社の企業風土には合っていました」

同じ時期、Ciscoとは別の製品を対象にテスト自動化の可否を探っていた経営企画本部 第1 応用技術部 飯田健二部長は、こう語る。

## 定量評価志向で、商談に活用されるテスト結果

現在同社では、標準検証というプロセスが完全に確立している。技術推進チームが、投資対効果の観点から対象に定めたネットワーク機器を一元的にテストを行い、イントラネットに公開する。

テスト効率も大幅に向上した。これは標準化の効用含めての数字ではあるが、なんと2ヶ月から2週間に短縮されたのだ。飯田氏は次のように語る。

「担当者がリストアップした項目をテストして結果をまとめ、またほかの方法でもちょっと見て、最終的にレポートをHTML化して…などとやっていたらあつという間に2ヶ月ぐら経ってしまいます。しかし、今は手順書どおり、項目表どおりなので迷うことがありませんし、判定まで自動化しているので非常に結果が出るまで早く、報告書もフォーマット化されているので簡単に作成可能です。何よりエンジニアは自動化により手が空き、他の作業ができるのが助かっています」

坂本氏は飯田氏を補足してこう語る。  
「テスト自動化を進めたことで、曖昧な解釈の余地をなくせたのもよかったですと思います。担当者によって判断にブレが生じるケースがありますが、曖昧な判断が介在しないので厳密なテストを行えるようになりました。」

今日は顧客も定量的な評価を好むようになり、テストの結果は営業部隊が顧客との商談にもよく活用される。これは同社が選択される土俵に上るためにも重要で、技術検証チームは社内から頼られる存在だ。

標準検証体制を確立して、安定して動くネットワーク製品を提供し、一定の品質を担保できるようになったことは、社内の人的リソース割り当ての面でも効用が大きいという。もし、顧客に提供したあとに問題が発生したとすると、ただちにエンジニアをアサインして解決に乗り出さなければならない。そうすれば本来着手できるはずの仕事が後回しになり、コスト的にも、時間的にも大きなダメージを負う。それを未然に防いでいるのである。

さらに、この標準検証体制は、同社と取引のあるネットワーク機器メーカーの知るところともなっている。ある外資系メーカーはこのテストプロセスを高く評価し、自社製品の出荷前テストをこの資産を使って行うほどだ。下手に言語でやりとりするより、テストスクリプトで何を行っているのかわかるのでコミュニケーションがスムーズに進むという。

“ものさし”を統一したことで、社内にも、そして社外にも、確信を持って製品評価を示せるようになり、それがまた同社の評価を押し上げる結果となっている。